

対人不安の生起・維持プロセスの理論モデルに関する展望

一回避的行動と自己愛，他者への関心の葛藤という観点から—

教育心理学コース 向井靖子

Review of Models of the Generation and Maintenance of Social Anxiety:
The Dilemma of Avoidance, Narcissism and Concern about Others.

Yasuko MUKAI

This paper reviews models of the generation and maintenance of social anxiety, aimed to apply to the treatment for social phobia and to the understanding of the mechanism of social anxiety. The models suggest 'Observer perspective' (as presumably seen by the audience) may influence social anxiety, vulnerability of influence of others. Studies of social anxiety in Japan (taijin-kyofu-sho ; anthropophobia) suggest the narcissistic aspect of social anxiety, but this aspect has been seldom examined. The paper also indicates the dilemma of avoidance behavior and concern about others, implicates the relation to vulnerability of influence of others that may be related to narcissism. Future perspectives of studies of social anxiety in Japan are discussed.

目次

- I. はじめに
- II. 定義の多様性と「対人状況における不安」という共通性
- III. 対人不安の生起・維持プロセスに関する3つのモデル
- IV. 自己愛と対人不安との関連—対人恐怖症研究における知見から—
- V. 対人不安の2面性—回避的行動と他者への関心との葛藤—
- VI. 今後の展望

I. はじめに

人前に出ると緊張する，という人々がいる。人からどう思われているかということばかりを気にし，自分の振る舞いが相手を不快にするのではないかと思いつく人々がいる。そしておどおどした振る舞いを実際にする人々もいれば，振る舞いには表れないものの実は内心不安でたまらない人々もいる。

心理学ではこのような状態を対人不安として捉えている。対人不安とは端的に言うと，他者との関わりに

困難を覚えることへの苦しみや悩みである。近年，国の内外を問わず，多くの研究者が対人不安のメカニズムに興味を抱き，研究を重ねてきた。そのため対人不安研究の分野はこの20～30年でめざましく発展した。しかし，なぜ対人不安がこれほどまで多くの人々に注目され，問題として取り上げられてきたのだろうか。

1つには，対人不安は一部の人々だけの特殊な悩みではないということが理由として挙げられる。とりわけ思春期・青年期の人々において，対人不安の悩みはよく報告される。木村(1982)によると日本の大学生501名のうち，約半数が対人不安(対人恐怖の傾向)を自覚していた。またドイツに住む思春期の人々1035名を対象としたEssau, Conradt & Petermann(1999)によると，47.2%が何らかの対人不安を経験していた。

もう1つには，人は他者の存在なしに適応的な社会生活を営むことができない，つまり人間は基本的に社会的な存在(梶田，1988)であることが理由として挙げられる。人として生まれた以上，他者と関わるという行為を避けて通ることはほぼ不可能に近い。そのため対人不安傾向の高い人々，すなわち他者を恐れ，他者との関わりを回避する行動傾向を持つ者は，抑うつ傾向も高い(Brady & Kendall, 1992)など精神的な苦痛を経験する可能性が高く，また様々な社会的不利益を蒙る

可能性も高いことが知られている (Turner, Beidel, Dancu & Keys, 1986)。

このように、対人不安とは思春期・青年期においてよく見られる悩みである。そしてこのような人々は様々な精神的・社会的不利益を蒙る可能性が高い。そのため、対人不安の悩みを持つ人々がより豊かな人間関係を構築し、その後の社会生活を適応的に過ごすことを目指すため、対人不安を生じ、維持しているプロセスの存在を明らかにし、援助や自助の手がかりに用いるモデルを提示していく必要がある。

本論文は以下の構成となっている。第Ⅱ章では、様々な定義や用語が混在している対人不安研究の領域において、これらの研究から得られた有用な知見の統合を図るべく、対人不安の定義の多様性と共通性について概観する。対人不安の定義を整理したうえで、第Ⅲ章では、従来の対人不安研究における主要な3つの主要なモデルを概観する。続く第Ⅳ章では、日本の対人恐怖症研究から得られた知見を概観し、今まで実証的に検討されることの少なかった自己愛と対人不安との関連について述べる。そして第Ⅴ章では、前章で概観してきた点をまとめ、回避行動と他者への関心という対人不安の二面性について指摘する。最後に第Ⅵ章で今後の展望について述べる。

Ⅱ. 定義の多様性と「対人状況における不安」という共通性

対人不安の定義は研究者によって様々である。「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」(Schlenker & Leary, 1982; Leary, 1983)、「人前に出たときに感じる不快感」(Buss, 1986)、「対人場面における苦悩・不快・恐怖・不安などの経験」であり「対人場面を意図的に回避すること」や「他者から否定的な評価を受けることへの恐れ」(Watson & Friend, 1969)、といった定義がある。このように対人不安の定義は、対人不安を喚起する先行要因に言及したもの、対人状況で感じる不快感そのものに注目したもの、対人不安の結果として回避行動に注目したものなど、研究者間で必ずしも一致しているわけではない。

対人不安の定義それ自体の多様性に加えて、対人不安に類似した概念との関連性も曖昧であるといえる。対人不安に類似した概念に、シャイネス (shyness)、社会恐怖 (social phobia; social anxiety disorder)、回避性人

格障害 (avoidant personality disorder) がある。これらの概念の違いとして、シャイネスがパーソナリティの特徴を表す概念であるのに対し、社会恐怖、回避性人格障害は臨床群に与えられる症状名である、ということを描き出すことができる。しかしこれらの概念は「対人状況において不安を感じる」といった悩み」という点では共通している。

また、社会恐怖の一種、あるいは日本を含む東アジア特有の神経症として、対人恐怖症 (taijin-kyofu-sho; anthropophobia) がある。対人恐怖症は、他者を不快にするのではないかと、という加害懸念、つまり offensive type として捉えられる点が特徴である。従来日本特有の神経症として議論されることが多かったが (内沼, 1997)、日本のみならず中国、韓国でも比較的良好に見られる神経症であり (北西・李・崔・中村, 1998)、日本でも社会恐怖の一種として対人恐怖症を捉える研究者 (笠原, 1995; 岡野, 1998) がいる。本研究でも、対人恐怖症に特有の加害懸念に注目しその独自性を議論するのではなく、その根底に共通する対人不安に注目することにより、これらの知見を参考にする。

このように様々な定義や用語が混在する対人不安の研究領域だが、これらの問題に対する一つの解決案として、本研究では菅原 (1992) の定義を用いる。菅原は「対人不安とは対人場面で個人が体験する不安感の総称」として、一つの研究領域に付けられた名前といった程度に考えておくことを提案している (菅原, 1996)。本論文もこの定義に従う。なぜならこの定義を用いることにより、「対人状況において不安を感じる」といった悩み」に関する多種多様な研究や知見を、対人不安という一つの共通概念で包含することが可能となるからである。それぞれの用語の特異性、独自性を追求するよりは、これらの有用な知見を一つの概念のもとに援用していくことのほうが、対人不安研究の発展を目指す立場からは、はるかに有用であると思われる。

続く第Ⅲ章、第Ⅳ章では、上記の立場から、従来の対人不安研究から提示されたモデル、日本における対人恐怖症研究をそれぞれ概観し、対人不安の生起・維持プロセスを理解するのに有用と思われる知見を取り上げていく。

Ⅲ. 対人不安の生起・維持プロセスに関する3つのモデル

対人不安に関する実証的研究がとりわけ認知行動的立場の研究者によって多く行われている。治療実践に

においても認知モデルに基づく治療の重要性が主張されており(Clark & Wells, 1995), 理論モデルに基づく治療実践の効果研究も多く行われている(例えばWells & Papageorgiou, 2001)。

このように、認知行動療法家にとっての理論モデルとは、臨床実践の根拠となるものであり、そのためモデルの妥当性を検討したり、より有用な知見を得るための実験や調査が様々な研究者によって積み重ねられている。実践に結びつく理論モデルの開発は、対人不安に限らず、日本においても今後の臨床実践の発展において必要とされてくるだろう。その足がかりの一つとして、本章では、対人不安の理論モデルとして比較的好く参照される、Schlenker & Leary(1982)の自己呈示理論モデル、Clark & Wells(1995)の認知モデル、Rapee & Heimberg(1997)の認知行動モデル、の3つのモデルを概観する。

対人不安に関する理論モデルのうち、最も古典的なものとして、対人不安の自己呈示理論(Schlenker & Leary, 1982)が挙げられる。これによると、対人不安は、他者に特別な印象を与えたいと動機づけられているが、そうできるかどうか疑問を持ち、他者から自分の印象に関連した不満足な対応を受ける可能性があるとして予想したときに生じると考えられている。つまり自己呈示理論では「他者に特定の印象を与えたいという動機づけ」と「それが成功するかどうかの疑わしさが高い」という2つの条件がそろって、はじめて対人不安が経験されるということになる。自己呈示理論モデルの場合、特定の治療実践を導き出すというよりは、これまでに得られた諸知見を自己呈示理論というモデルとして統合したという側面が強い。

次に概観する2つのモデルは、明らかに治療実践を視野に入れたものといえる。Clark & Wells(1995)が提示したモデルによると、対人不安の高い人は、身体症状を危険や不安のシグナルと解釈しがちであり、また、他者からの否定的評価にとらわれやすい。そのため対人的手がかりに関する処理に偏りが生じる。その結果、回避のような「安全な」行動に出る。このような「安全な」行動は他者からの友好的な関わりを妨げることがあるため、ネガティブな相互作用のパターンが生まれがちである。これによって、より対人不安な確信を高めるといった悪循環が生じ、対人不安が維持、悪化するのだという。

また、Rapee & Heimberg(1997)が提示したモデルによると、対人不安の高い人には、知覚の段階で注意を向けている情報資源に偏りがある。そのため、否定的

評価に関する外的手がかり(周囲からのフィードバック)、内的手がかり(身体症状)に注目してしまい、人から見られているという自己イメージを喚起してしまう。そこで人々が期待する「標準」と自己イメージとを照らし合わせ、否定的評価を受けるのではないかと考えるため、行動・認知・身体的な不安症状が生起する。また、これらの症状が外的・内的手がかりとしてまた知覚されることにより悪循環が生じ、対人不安が維持されるのだという。

以上、これらのモデルを概観してきたが、これらをまとめると「あるイメージの自己呈示を行いたいという欲求が強い」「否定的な評価を恐れる傾向が強い」「否定的なフィードバックに対する選択的な認知の歪みがある」「回避行動による望ましくない対人パターンが生じている」といった要因が対人不安に関連する要因として重要視されているといえる。すなわち、①他者と関わる際の動機のレベル、②他者からの評価に対する感受性のレベル、③情報選択における歪みのレベル、④望ましくない行動パターンのレベル、といった4つのレベルから対人不安が捉えられてきたと考えることができる(表1)。

またいずれのモデルにおいても、対人不安の高い人は、⑤「他者の視点」に影響されていることが示唆されている。「他者の視点」について、Clark & Wells(1995)においてはobserver perspectiveという表現が、Rapee & Heimberg(1997)においては、as presumably seen by the audienceという表現がなされている。ただしここでの「他者の視点」とは、必ずしも客観的な視点ではない、つまり、「あたかも(as if)」他者の視点から捉えている、という留保つきなのである。いずれにせよ、対人不安を議論する際、「他者の視点」に影響されるという側面は注目すべき重要な要因であると言える。

表1 対人不安の理論モデルに見られるレベルと側面

①他者と関わる際の動機のレベル	} → ⑤「他者の視点」 に影響されて いるという側面
②他者からの評価に対する感受性のレベル	
③情報選択における歪みのレベル	
④望ましくない行動パターンのレベル	

IV. 自己愛と対人不安との関連

—対人恐怖症研究における知見から—

前章では対人不安の生起・維持プロセスについての3つの理論モデルを概観した。本章では日本における対人恐怖症に関する諸知見を概観する。対人恐怖症に

関しては、各治療者が示唆に富む指摘を与えているのだが、対人不安研究としては、なかなか実証的研究の俎上に乗りにくいという現状がある。それは対人恐怖症に関する知見が日本文化の特異性といった議論に還元されやすく、対人不安としての共通性を議論するのに用いるべきではないという暗黙の姿勢があったからかもしれない。また、そこで用いられる諸概念も、そのまま構成概念として扱うにはやや漠然としすぎており、質問紙調査をはじめとする実証的な検討にそぐわなかったこともあるだろう。

しかし、対人恐怖症に関する知見が、文化特異性への還元傾向や実証的検討の難しさといった理由だけで、実証的な対人不安研究の枠外に置かれ続けるべきではないと考える。なぜなら対人恐怖症に関する知見には、対人不安の生起・維持プロセスを考える上で重要な、しかし第2章で概観した理論モデルで説明するには不十分な、自己愛と対人不安との関連という視点が見られるからであり、少なくとも日本における対人不安の理論モデルを検討、提示していくのであれば、必ず考慮すべき視点であると考えられるからである。そこで以下、対人恐怖症に対し、具体的にどのような知見が得られ、どのように議論されているかを見ていくことにする。

対人恐怖症者には、他者の言動すべてを自己関係づけるという被害感、自分の視線や顔色、臭いが相手に悪影響を与えると考える加害感が見られる(山下, 1970)ことが指摘される一方で、一種の万能感、すなわち自己の過大視が見られることも指摘されている(鈴木, 1976)。岡野(1998)はこの問題を自己愛という観点から議論しており、自己愛と対人不安との関連を示唆している。岡野によれば、対人不安に悩む人は自分を恥に思う気持ちが強いと同時に、人前で完璧に振る舞いたい、それにより人から尊敬や羨望の目を向けられたいという願望を強く持つことが多い。この極端な二つの自己イメージは自己愛の病理に共通するという指摘がなされている。

北西(2001)もまた、対人恐怖症者に見られる自己愛的側面を指摘している。北西は対人恐怖症者の誇大な自己像に注目し、彼らが他者の承認を求め続け、他者に優越することを目指していると指摘する。また、このような自己中心的な人々は、常に自己の存在と周囲の世界とを独断的に関係づける人たちでもあることを指摘している。つまり、対人恐怖症者が見ているのは他者を通して映る自分ではないということ、また、人に気をつかい、人の思惑を気にする人はきわめて自

己中心的である、ということを指摘している。

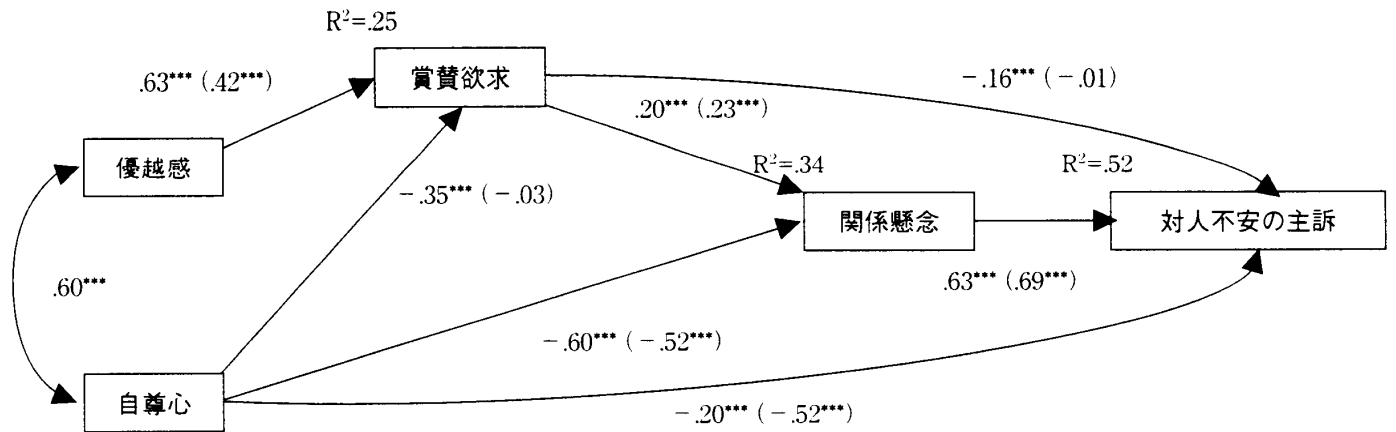
このように、日本における対人恐怖症の諸知見においては、自己愛、とりわけ、誇大な自己と対人不安との関連が注目され、示唆されてきた。また、第3章で概観した理論モデルが注目するレベルとも共通する部分が見て取れる。

しかし対人不安と自己愛、とりわけ誇大した自己との関連について、第3章で概観した理論モデルでは、対人不安の規定因として直接には取り扱われていない。そこで実証的研究の俎上に乗る形として、構成概念としての自己愛を定義する必要がある。そのためには従来社会心理学の領域で扱われてきた自己愛の定義を振り返る必要がある。次に、自尊心という概念との違いについても明確にしておく必要がある。

自尊心、自己愛ともその定義は、対人不安の定義同様、研究者によって様々である。ここでは自尊心(自尊感情)を「自分自身で自己に対する尊重や価値を評定する程度」(Rosenberg, 1965)と定義し、自己愛を「他者より優越しているという感覚に特徴付けられるもの」(Bushman & Baumeister, 1998)と捉える(下線部は筆者)。すなわち自尊心があくまで自分自身における満足度なのに対し、自己愛は他者と比較して自分が優れていることを確認しているという点が異なっている。

他者を必要とする自己愛と、必ずしも他者を必要としない自尊心とは明らかに異なる概念である。だが一方で、自己愛と自尊心の間には有意な正の相関が認められてきた(Emmons, 1984; Raskin, Novacek & Hogan, 1991)。つまり、概念としては異なるものの、自己愛の高い人は、同時に高い自尊心を有している傾向がある。このため自己愛と対人不安との関連を検討する際には、自尊心の高さによる影響を考慮しなければならない。例えば先行研究において、NPI(自己愛人格目録; Raskin & Hall, 1981; 日本語版は大石, 1987)によって測定された自己愛と対人不安の間には負の相関が示されている(Emmons, 1984)。しかし先述したとおり、自尊心と自己愛には正の関連があることから、自尊心の影響によって自己愛と対人不安との間に負の相関が得られている可能性が否定できない。

なお、NPIには、研究によって因子数は定まっていないものの、下位構造が見出されている。NPIの下位構造において対人不安との関連を見た場合、小塩(1998)では、自己愛の下位尺度の一つである「注目・賞賛欲求」の高さと、「評価への過敏さ」(対人不安の認知的側面)との間に、弱いものの有意な正の相関を認めている。また、先述の自尊心の影響についても、「優越



数値は標準偏回帰係数 ()内は単相関係数 ** $p < .01$, *** $p < .001$

図1. 「自尊心」の影響を統制した場合における、「優越感」と対人不安（「関係懸念」「対人不安の主訴」）との関連—「賞賛欲求」を媒介として—（向井,2001b）

感」(他者との比較による自己高揚)と「賞賛欲求」(他者からの注目・賞賛を望む傾向)の2側面から自己愛に注目し、その上で自尊心の影響を統制したところ、「優越感」は「賞賛欲求」を媒介することによって「関係懸念」(対人不安の認知的側面)の高さに影響を与えることが示されている(向井, 2001b)(図1)。

確かに岡野や北西の示唆するような対人不安と自己愛との関連を実証的に検討したものはまだ数少ないが、上記の試みに見られるように、構成概念の定義を明確にし、適切な分析方法を用いた検討を行うことによって、十分実証的に検討することができるだろう。このような実証的研究の積み重ねによって、幾分経験的直観的とも言える対人恐怖症に関する諸知見を、新たな理論モデルとして可視化して提示していく試みは、治療効果の実証的な検討を行う上で必要不可欠であると思われる。

V. 対人不安の2面性

—回避的行動と他者への関心との葛藤—

ここまでの章で、従来提示されてきた対人不安の生起・維持プロセスに関する理論モデル、対人恐怖症に関する諸知見を概観し、日本における対人恐怖症についての経験的知見もまた、理論モデルとして実証的研究の俎上に十分乗りうることを示してきた。

第V章では、これらの議論を踏まえ、対人不安の高い人々が、回避的行動を取りがち一方で、他者への関心を示していると思われる認知的側面に注目し、対人不安の2面性を議論し、新たな仮説を提示したい。

対人不安の行動的側面と認知的側面を区別して捉

え、提示した研究に永井(1991, 1998)がある。永井は対人恐怖的心性として、対人不安が「対人状況における行動・態度」(対人状況における自分自身の行動、態度、話し方、振舞いなどにおける支障に関する訴え)「関係的自己意識」(他者からどのように自分が見られているのか)「内省的自己意識」(自分自身に対する自信のなさ)の3側面から捉えられることを因子分析によって示している。このうち「内省的自己意識」は必ずしも対人不安に特有の側面とは言えないため、ここでは対人不安の行動的側面と考えられる「対人状況における行動・態度」、および、認知的側面と考えられる「関係的自己意識」の2側面にのみ注目する(なお、上記の2概念は、行動的側面と認知的側面を明確にするために、向井(2001a, 2001b)において「対人不安の主訴」「関係懸念」という概念名で表されているが、測定に用いた尺度項目は同じである)。上記の行動的側面と認知的側面の間には高い正の相関が見られるものの、因子分析の結果これらは別々の因子によって説明が可能であることが示されており、向井(2001b)の結果からも両概念の差異が示唆されている(前述の図1参照)。例えば「賞賛欲求」の高さは、他の要因を一定にしたとき、「対人不安の主訴」の低さと関連しているが、一方で「関係懸念」の高さと関連しているのである。

ところで、回避的行動が他者との関わりを恐れる結果生じるということは容易に想像できる。一方、一般青年の被害妄想的観念(対人不安の認知的側面と捉えることが可能である)に注目した金子(2000)が「自己関係づけ(他者の言動を被害的に解釈する傾向)は他者への関心のあらわれ」であることを示唆している。このことは上記に示したような、他者を回避する対人不安の行

動・態度の側面からは一見矛盾した示唆のように思われる。だが本当にこれは矛盾しているのだろうか。他者への関心の強さ、あるいは、他者からの影響のされやすさゆえに、他者を避けるという行動に結びつく可能性は考えられないだろうか。

対人不安の高い人は、様々な側面で他者からの影響を強く受けていることがいくつかの研究から示唆されている。Wallace & Alden (1991)では対人不安の高い人は相手の基準に合わせようとするのが示されており、社会恐怖症者を対象にしたWells, Clark & Ahmad (1998)の実験では、対人不安の高い人には他者の視点から対人状況を捉える傾向があることが確認されている。また、向井(2001a)は、他者の意見や判断に対する「流されやすさ」に注目し、対人不安との関連を検討している。その結果、他者の意見や判断に対する「流されやすさ」の高さと対人不安の高さには正の相関が見られることが示されている(図2)。このように、対人不安傾向の高い人は、そうでない人に比べ、他者に影響されやすい傾向が見られている。またそれは、Wellsらが指摘するような、「あたかも」他者の視点から対人状況を捉えるという、自らに不利な視点からのものの捉え方によるものである、という可能性が予想される。

向井(2001a)ではまた、「流されやすさ」の高さが自己愛の一側面である「賞賛欲求」の高さに影響していることを示している。自己愛の高い人々は、賞賛を求め、他者と同一化するという独特の対人関係によって、自己高揚を行っている(Campbell, 1999)。そのため自己愛の高い人にとって、対人状況とは自己の優越性を確認するための資源であるといえるだろう。しかし彼らにはネガティブな評価に傷つきやすい(Bushman & Baumeister, 1998)という側面もある。つまり自己愛には、「傷つきやすさ・過敏性」と「誇大性・自己顕示傾

向」の二つの側面がある(Wink, 1991)。このような自己愛の側面は、自分では自信を持っていても、同時にその自信は他者からの評価によって容易に崩れてしまうようなあり方を意味している(小塩, 1998)。つまり、自己愛の高い人が高い自信を有していたとしても、それは他者の評価に依拠する不安定なものである可能性が高い。このような形で他者を必要とするために、他者に影響されやすい状態に自らを置くというプロセスが存在する可能性が考えられる。他者に影響されやすい、他者に「流されやすい」ということは、他者の行動、他者の意見や判断に一喜一憂させられるということである。しかもそれが「あたかも」他者の視点から見たものにすぎなければ、彼らの他者認知は、被害懸念や加害懸念という妄想的観念に近いものになる可能性が十分に予想される。すると今度は他者の批判を恐れ、他者を回避する行動を選択するようになる可能性が考えられる。しかしそのことは、他者への関心の高い人々、他者を必要とする人々にとっては、不本意な選択であるかもしれない。

もし上記のような葛藤が存在するのであれば、他者に感じる「怖さ」や不安とは、アンビバレントな感情が共存した結果、生ずると予想することもできる。近づきたいのに近づけないといった、対人不安特有のメカニズムが存在する可能性があるとするれば、「怖さ」や不安を感じる相手に対し、単なる恐怖以外のポジティブな感情、あるいは自己愛の脅威に関する記述が見出されることが予想される。また、他者への関心が対人不安の認知的側面に影響しているとするれば、なぜ他者への関心が、ある人々には対人不安をもたらし、ある人々にはもたらさないのか、を詳しく検討していく必要があると思われる。

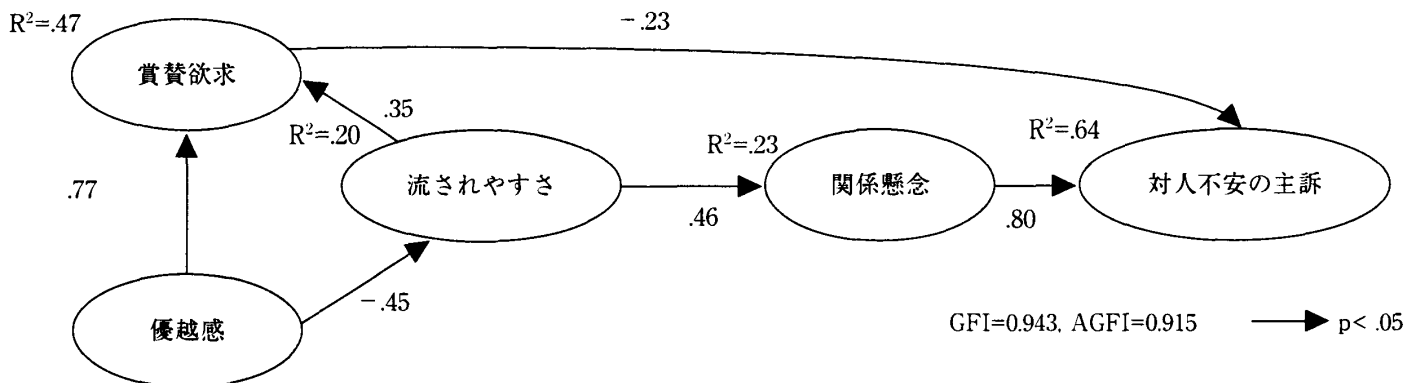


図2. 他者の意見や判断に対する「流されやすさ」と対人不安(「関係懸念」「対人不安の主訴」との関連(向井,2001a)

VI. 今後の展望

まず、日本における対人不安に関する実証的研究を更に積み重ねていくことが求められるだろう。日本における対人不安研究は、質問紙による調査研究の要素が強く、臨床実践的な側面が弱いと言える。日本における対人不安の生起・維持プロセスの理論モデルが新たに提起される可能性は十分ありうる。そのときは、欧米のように理論モデルをベースとした治療実践を行い、その効果を検討していくといった方向性が今後求められていくのではないかと思われる。Clark & Wells (1995)が認知モデルに基づく治療の重要性を主張するように、日本でも今後、実証的に検討された理論モデルに基づく援助や介入が求められるだろう。

また、冒頭に述べたとおり、一般青年の多くが対人不安を経験している今日、一般青年を対象にした研究は、上記のように臨床群との連続性を考慮に入れたアナログ研究という意義のみならず、一般青年自身の公衆衛生学的観点から今後ますます重要になってくるだろう。また、臨床群における詳細な実証的検討を行い、一般青年群との差異を検討していくことで、日本においても対人不安における一般青年群と臨床群との連続性が見出されるのか(註1)、あるいは、そこに質的差異が見出されるのであれば、それが何であるのかを突き詰めていく必要があるだろう。

(指導教官 下山晴彦助教授)

註

- 1) 対人不安傾向の高い非臨床群(大学生)と社会恐怖患者とを比較したTurner, Beidel & Larkin (1986)では、認知パターンや生理的反応に類似性が認められており、対人不安におけるアナログ研究の妥当性が支持されているといえるだろう。シャイネスと社会恐怖についても概念の類似性が議論されている(Turner, Beidel & Townsley, 1990)。

引用文献

- Brady, E.U. & Kendall, P.C. 1992 Comorbidity of anxiety and depression in children and adolescents. *Psychological Bulletin*, 111, 244-255
- Bushman, B.J. & Baumeister, R.F. 1998 Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 219-229
- Buss, A.H. 1986 *Social behavior and personality*. Lawrence Erlbaum Associates. (A・H・バス著 大淵憲一 監訳 1991 対人行動とパーソナリティ 北大路書房)
- Campbell, W.K. 1999 Narcissism and romantic attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1254-1270
- Clark, D.M. & Wells, A. 1995 A Cognitive Model of Social Phobia. Heimberg, R.G., Liebowitz, M.R., Hope, D.A. and Schneier, F.R. *Social phobia: diagnosis, assessment, and treatment*. The Guilford Press. 69-93
- Emmons, R.A. 1984 Factor analysis and construct validity of the Narcissistic Personality Inventory. *Journal of Personality Assessment*, 48, 291-300
- Essau, C.A., Conradt, J. & Petermann, F. 1999 Frequency and Comorbidity of Social Phobia and Social Fears in Adolescents. *Behaviour Research and Therapy*, 37, 831-843
- 梶田観一 1988 自己意識の心理学[第2版] 東京大学出版会
- 金子一史 2000 青年期心性としての自己関係づけ 教育心理学研究, 48, 473-480
- 笠原敏彦 1995 対人恐怖と社会恐怖(ICD-10)の診断について 精神神経学雑誌, 97, 357-366
- 北西憲二・李時炯・崔玉華・中村敬 1998 東アジアにおける対人恐怖の発見とその治療 精神医学, 40, 493-498
- 北西憲二 2001 我執の病理 白揚社
- 木村駿 1982 日本人の対人恐怖 勁草書房
- Leary, M.R. 1983 *Understanding social anxiety*. Sage Publications. (M・R・リアリイ著 生和秀敏 監訳 1990 対人不安 北大路書房)
- 向井靖子 2001a 他者の意見や判断に対する「流されやすさ」傾向と対人不安との関連 日本教育心理学会第43回総会発表論文集
- 向井靖子 2001b 優越感と賞賛欲求が対人不安に及ぼす影響 日本心理学会第65回大会発表論文集
- 永井徹 1991 対人恐怖の心性の構造について—対人恐怖の心性の質問紙の作成— 聖セシリア女子短期大学紀要, 16, 50-55
- 永井徹 1998 対人不安における心理的・認知的アセスメント 季刊 精神科診断学, 9, 479-488
- 大石史博 1987 ナルシシズムの心理学的研究(1) 人文論究, 37, 27-44
- 岡野憲一郎 1998 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで— 岩崎学術出版社
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290
- Rapee, R.M. & Heimberg, R.G. 1997 A Cognitive-Behavioral Model of Anxiety in Social Phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 35, 741-756
- Raskin, R.N. & Hall, C.S. 1981 The Narcissistic Personality Inventory: Alternate form reliability and further evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, 45, 159-162
- Raskin, R., Novacek, J. & Hogan, R. 1991 Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of Personality*, 59, 19-38
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- Schlenker, B.R. & Leary, M.R. 1982 Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669

- 菅原健介 1992 対人不安の類型に関する研究 社会心理学研究, 7, 19-28
- 菅原健介 1996 対人不安と社会的スキル 相川充・津村俊充 対人行動学研究シリーズ1 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する 誠信書房 112-128
- 鈴木睦夫 1976 対人恐怖症における対自と対他 京都大学教育学部紀要, 22, 72-81
- Turner, S.M., Beidel, D.C. & Larkin, K.T. 1986 Situational determinants of social anxiety in clinic and nonclinic samples: Physiological and cognitive correlates. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 54, 523-527
- Turner, S.M., Beidel, D.C. & Townsley, R.M. 1990 Social phobia: Relationship to shyness. *Behaviour Research and Therapy*, 28, 497-505
- 内沼幸雄 1997 対人恐怖の心理—羞恥と日本人 講談社学術文庫
- Wallace, S.T. & Alden, L.E. 1991 A comparison of social standards and perceived ability in anxious and nonanxious men. *Cognitive Therapy and Research*, 15, 237-254
- Watson, D. & Friend, R. 1969 Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 448-457
- Wells, A., Clark, D.M. & Ahmad, S. 1998 How do I look with my minds eye: perspective taking in social phobic imagery. *Behaviour Research and Therapy*, 36, 631-634.
- Wells, A. & Papageorgiou, C. 2001 Brief cognitive therapy for social phobia: a case series. *Behaviour Research and Therapy*, 39, 713-720
- Wink, P. 1991 Two faces of Narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 590-597
- 山下格 1970 対人恐怖について 精神医学, 12, 365-374